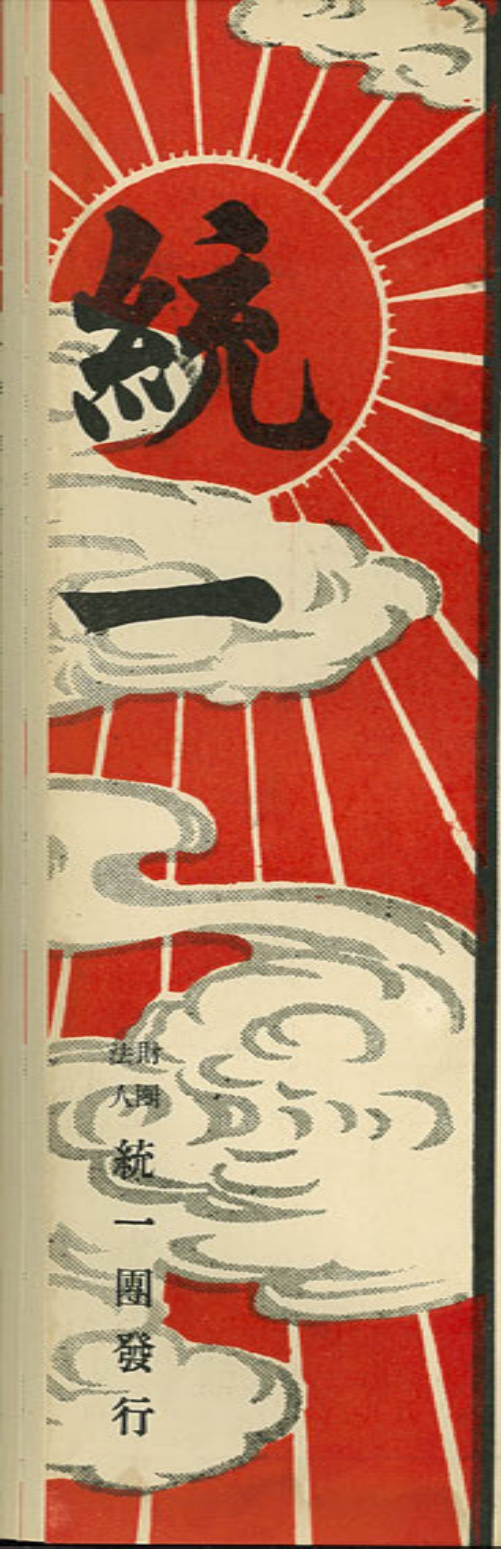


目次

聖語
三首御詠義解（下）……日生上人
東西文化の本質的絶對差異を提唱せよ……二木謙三
釋尊の悲智に感孚して……礒部滿事
解放欄
二冊の本から……上田辰卯
至誠の力……日比野妙鏡
所感……北村旭三
求道熱……みどり
○本部團報並に各地教信　○寄附團費誌料領收

第三十八年九月號

聖語

此の如く三災七難　數十年起りて民半分に滅じ　殘りは或は父母　或は兄弟　或は妻子にわかれて歎く聲　秋の虫にことならず。家家のちりうする事　冬の草木の雪にせめられたるに似たり。是はいかなる事ぞと經論を引き見候へば　佛の言く　法華經と申す經を謗じ　我を用ひざる國あらばかかる事あるべしと　佛の記しをかせ給ひて候御言にすこしもたがひ候はず。

（妙法尼御返事縮遺一七七三）

三首御詠義解（下）

日生上人

それ故に「自から横しまに降る雨はあらじ」の一首は、東洋文化の心髓に基き、法華經の極致に徹底した所の佛性の自覺を本にして、人格の修養を教へられた御教訓であると斯ういふ意味にお考になつたならば宜からうと思ふ。

それから第二の御歌、

葦の葉の形は舟に似たれども
浪華の人を得こそわたされ

といふのは教を擇ぶことである。この教を擇ぶといふことは日蓮聖人の特別の教訓であつて、他の宗旨では或は教といふものを曖昧な態度で說く者もあるけれども、日蓮聖人は、教でさへあれば何でも宜いといふやうなことは一番嫌ひであつた、それが爲めに法難にもお遭ひになつたのである。併ながらこの教を擇ぶといふことは決して頑固でいふのではない、拗けていふのではない。教ぐらゐ大事なものはないからして、教といふものは撰擇ばなければならない。元來佛の御教は教を擇ぶといふことを非常に强

く説かれたのである、阿含などは『七覺支』と言つて、教を擇ぶところの考が出來ない以上には佛教信者になれないと迄で説かれた、何でも宜いといふやうなものなれば釋迦如來は俺の説法を聽く必要はないと言はれた。教はいろ〳〵あるけれどもその中に間違つたものもあり、淺いものもあるのだから、一番宜い教を得たいものだといふ無上道を欲求するところの精神にある者は來れ、無上道を求めずして何でも間に合せのもので宜いといふやうな者は我が教に來ることは要らぬといふことを始終説かれた。そこでどのお經を御覽になつても、例へば方便品に於いても『未曾有法』とか或は『第一希有難解之法』とか言つて、希有とか未曾有といふことが澤山説いてある、希有といふのは稀れに有ると書いてある、未曾有とは未だ曾て有らざるといふことで、世の中にありふれた教ではない、我が教は釋迦獨特なるものであるといふことを始終言うて居る。お弟子達がいふ時分でもみなさう言うて居る、これが非常な意味のある事である。法華經を聽いて大勢の人が感謝する時分でも、佛は未曾有の法を説き給ふたといふことを申上げて居る、ありふれた何處でも間に合ふやうなものなれば、何も別に佛樣を要しないのである。

所が今日はさういふ教を擇ぶといふ點に於て、非常な疎雜な風が行はれて居る。これが又日本文化の一つの缺點である、『宗旨ナンといふものは何でも宜いぢやないか』といふやうなことを言つて居る、これは低い者、間違ふた者が多い爲めに斯ういふ相場を拵へてしまつたものである。宗旨を吟味するといふことを唯だ卑しいことのやうに言つて『宗旨のことなど何でも宜いぢやないか、マア一抔やれ』といふやうなことがえらい人の如く、達人の如く思うて、政治家などでも『宗教といふものは何でも宜い何宗でなければならぬといふやうなそんな客なことは言はぬ』と言つて豪傑氣取で居る、それは非常に間違つたことである。何故かといつたならば宗教はその人一代の精神を支配するのみならず、一番大事な心の奥を支配するものである、さうして宗教は傳播性を持つものであるから、斯ういふ教を自分が信じたならば子供にもそれを教へて行く、亭主が信じたならば女房にも教へて行く、女房が信じたならば亭主をその信仰に導く、近所の人を教へ、往いては全人類に向つてその教を傳播しようとするものであるから、その中に疵があつたならば、その疵が非常な勢ひを以つて世界に擴まつて行くのである。大本教みたやうなものや、天理教みたやうなものでも、さういふものが擴まつて行けば、或る一部分の善い所はあつてもその中に一つの大きな惡いものがあつて、それが非常な害毒を社會に流すのである、故に教は撰擇ばなければならない、師は撰ばなければならないといふことが、佛教に於いては非常に嚴密な教訓となつて居るのである。

そこでその教を撰ぶ標準に佛教といふものは『印』といふことを説いたのである。印形などといふものもこの佛教の印から出た言葉である、『法印』などといふのも皆それである。斯ういふ事があれば佛教であるといふその印に、いつでも判かるやうに判を捺して『これは佛教だ』といふのである。今日大

乘非佛說とか何とかいふことを學者が唱へるけれども、何も書物の一々に就いて誰がこの本を書いたとか、このお經を寫したとかいふやうなことを言はなくとも、その中に說いてある事柄、それが佛法であるかないかといふことを見極めさへすれば宜いのである。假にそれが壁に貼つてあらうが、乞食の言ひ傳へた事であらうが、その事柄に依つて『その言葉はそれは佛法ぢや』『それは佛法に違うて居る』といふことがちやんと判かるやうにしてある。さうすると今日の多くの信者などの言ひ居るものは、多くの場合は佛法でないといふことが判かる。

然らば佛法といふものゝ印は何を第一に置いたかといふと、小乘の方に於ては『三法印』と申して居りますが、その三法印を貫いて居るものは四諦の敎でありまして、その四諦の敎を貫いて居るものは因果の法則といふことであります。この惡い者は落ちこんで行き、善い者は向上して行くといふ因果といふものを宗敎的、道德的に釋迦如來は說いたのである。因緣因果の理といふものは佛法の大敎義である、その因緣因果の法則といふものを嚴密に段々進めて行くといふと、そこに愈々法華經の敎でなければならないといふことが判つて來るのである。

因緣因果の敎といふものはどういふ事から起つたかといふと、第一は人間の靈魂に就いて三世因果といふことから、簡單な所は出發するのである。三世を說かなければ佛法の法印ではない、人間の靈魂の過去といふものはどうであつた、現在はどうである、未來はどうであるといふやうに、その思想が過去

現在、未來に亘る三世觀念といふものを有たなければならぬのである。帝釋さまを信心して唯だ現在に於て商賣が繁昌するやうにといふだけで、過去も考へず未來も考へないやうな、己れの生命の問題の無限永續といふことを考へないで掌を合せるやうな者は、これはみな婆羅門外道の敎である。日本人はどうもその一種の惡い現世病といふものがある、何でも宗敎を現世的にしてしまふ、今日世の中に宗敎として流行つて居るものは現世敎である、成田の不動といつて見た所が何であるか、それは火事の災難を免かれしめるといふ火事除けである、火事除けといふやうなことは唯だ現在に生活して居るその家が燒けぬやうにといふだけのことで、生命の問題には少しも觸れて居ない。或は堀の內の御祖師さまが流行るといふのも、厄除の御祖師さまといふやうなことで行くのである。その『厄』といふのはこの人間の現在生活に於ける厄難を免れたいといふに過ぎない。川崎の大師が流行るとか宮守の稻荷が流行るとかいふやうなことも、皆その現世敎である。宗敎が唯だ現世だけを問題とするならば、それは宗敎をなさないものである。釋迦は、人間の生命は過去、生れる以前を考へて觀れば六道流轉を辿つて、生れかはり死にかはりして幾度となく或は榮え、或は衰へ、或は美人と生れ、或は乞食と生れ、樣々に變更して居る所のその過去の存在といふものを觀なければならぬ。現在が幸福だとか不幸福だとか言つた所が、現在ぐらゐのことではない、現在に於て彼は貧しい生活をして居ると言つても、過去に於てはモツとえらい餓鬼になつたこともあれば、地獄に陷つたこともある。又未來に就いても考へたならばモツと苦い

ことにもなるといふことが、佛法の信仰觀念の始めに必ず出て來なければならぬ。それを考へないでいきなりこの世だけで行くといふやうな者は、之れを邪教と釋迦牟尼は仰しやつた、さういふ思想から來る者は佛法に入ることを許されないのである。それはモウ阿含の最初から佛教の終りに至る迄、三世因果の法則といふものが佛法の大原則になつて居る、又そこから組立てたものでなければ嚴密な宗教といふものは出來て來ないのである。

その場合に人間の靈魂が偶然といふか或は自然といふか、人間が生れかはり死にかはりして行くには何も別に因果の法則も何もないといふことになつたならば、どうして人間といふものはその果報が決まるのであるか。生れながらにして賢い人もあり、身分の高い人もあり、幸福に暮す人もあり、又生れつき馬鹿であつて、お負けに乞食になつて茶碗の持ち方も知らんやうな愚かな者もあるといふ譯であるがさういふやうに同じ人生に於ても非常な違ひのあるのは何に基くか。それを説明するにはどうしてもこの因緣因果の法則といふものがあるといふことを説かなければ説明が出來ないのである、佛教はそれを教へて行つたものである。

西洋にはさういふ文化が無いものであるからさういふ事がわからない、『同じ神樣の子でありながら左樣な區別の生ずるのはどういふ譯であらうか、神樣に偏頗があるのではないか』といふ疑問が起る、『それは神樣に偏頗がある』とは言へないものだから『自由意思』といふやうなことを言つて、人間の意思

に依つて勝手に乞食になりたいと思うて乞食になつたのだといふやうな説明をする。併ながら世の中には決して乞食になりたいと最初から思ふ者はない、いろ〳〵の事情に依つて乞食にもなつて行くのである。そこで世間では説明のしやうが無いものだから今度は『運』といふやうなことを言ふ、運賦天賦まわり合せちやと言つて、運といふやうな字で誤魔化して居る。併これも甚だ淺薄な考へ方であつて『運』といふ字は唯だグル〳〵廻るといふ字である、さういふことは佛法は認めないのである、唯だ運賦天賦だの、神樣のやり方だの、そんな事をいふのではない、各々自分の自業自得のものであつて、自分が六道流轉の輪廻の中に於て爲したる業因業果の理といふものが今日儼然として現はれて來て居るものであるといふことを確信するのである。

そんな事はモウ佛法の入口で決めなければならぬ、その思想に背いて居る者は之れを因果撥無の外道と言つて、何よりも恐しいことゝされて居る。外道は親殺しよりも罪が深いといふのである、因果の法則に敵するならば如何なる善人でも地獄の底詰めちやと説いたのが佛の教であつた。であるから自分の心はこの因果の法則といふものにピツタリ服從して行かなければならぬのである。

さういふ事になるからして段々この因果の法則で割出して行くと、茲に本當の教の意義が起つて來るのである。それは前に一つ現はれた所の『佛性』といふものと、それからこの佛性を開く所の『本佛』とのこの二つの關係が因果の法則の中から説明されて行くのである。如何にして佛性を現はすことが出

來やうか、どういふ方法に依つたならば自分の佛性が現はれて來るか、唯だ『現はしたい現はしたい』といふだけでは現はれて來ないのである、如何にせばこの自分の佛性が現はされるかといふ所に因果の法則といふものを考へることになる。

それに就いての教を本當に說かれたものが法華經である、阿彌陀經や何かはこの佛性といふものに少しも力を入れない、唯だ阿彌陀樣が『どんな者でも救つてやるぞ』と言はれた『ハーさうか……』といふやうなことになつて居る。法華經の方は佛性の自覺から促がされて、如何なる人間でも佛性の覺醒といふものを非常に强く說かれた。法華經の始めの方便品からズッと考へて行つて見るといふと、佛は何故に世に出現し給ふたか、それは他の目的ではない、一切衆生の有つて居るところの佛智見を開かんが爲めの故に世に出たのである、お前等の佛性を開かうと思うたのである、汝には佛性が有るのである、即ち立派な珠を有つて居りながら、それを醉ぱらつて忘れて居るのである、長者の子でありながら遂うて出て乞食をして居るのであると言つて、盛んに佛性の自覺といふものを促された。それを除つては法華經の半分といふものは無くなつてしまふ。又後の方に行つても不輕菩薩品などは、不輕菩薩があらゆる人を禮拜して佛性の自覺を促されたことを說いて居る、それはみな因果の教から起つて來るのである。

因果といふ事はどういふ事かといふと、唯だそこに爲した所の業因業果といふことだけではないのである。茲に或る一つの事をした、即ち業の因を爲した、だから業の果を得て居るといふだけではないのであつて、その業因を爲して業果が現はれて來るところのモウ一つの前に、本因本果といふものを說かれて居る。これは少し話がむづかしくなるけれども、譬へを以つて申せば能く判かる、根本に現はれて出る所の性質から因果といふものを考へて見なければならぬ。例へば茲に磨くといふ因があつたから光るといふ結果が現はれたと言つても、その物が光るべき珠でなかつたならば、いくら磨いても〳〵光るといふ結果は現はれないのである。即ち有名な話になつて居る卞和が荊山の麓に足を切られて泣いたといふ話があるが、彼は磨けば立派な珠となるべきものを捜し出したのである、さうして之れを『磨いてさへ貰へば珠に成るのであります』と言つて王樣に献上した、けれども磨いても珠に成らなかつた、その罰として足を切られた、けれども彼は『それは玉磨きが下手だからであります、立派な磨き方をして貰へば屹度光ります』と言つて泣いた。斯くしてとう〳〵三代目の王樣が良い玉磨きを得て磨かした所が非常に立派な玉に成つた、所謂趙氏連城の璧といつて非常な立派な玉になつたのである。その樣に磨けば玉になるといふ根本が無くては駄目なのである、その卞和の有つて居る璞玉は、根本に磨けば光る素質を有つて居る、唯だの石ではなかつた。丁度その事が法華經に於ては非常に能く說かれて居る、併しそこには玉磨きの名人といふ者が出て來なければならない、その名人が法華經に於ては本佛釋尊であつて、釋尊に依つてこの佛性の珠が磨かれるといふことになつて來るのである。誰でも磨ささへすれば

宜いといふのは一通りのことであるが、そこに非常な大事な問題があつて、『正因』といつて自分が有つて居る所の佛性と、『緣因』といつてそれを磨く手傳ひになるべきものと、『了因』といつて本當の之れを磨く力といふものとの、この三因の關係を法華經に於ては能く敎へられた。その緣因といふのは總ての善根がみな之れを助け成すのである。屢々お話をしたこともあると思ふが、之れを婦人が子を生むことに譬へたならば、正因といふのは婦人の有つて居る所の子供の種になるものである、即ち婦人の體質上に於て卵巢といふものがある、それが即ち正因となるのである。それから緣因といふのは、いろ〳〵御馳走を食べたり、身體を冷へないやうにしたり、衛生を守り榮養を重んじて行かなければ、如何に婦人が居つたからと言つて斷食などをして居れば子供は出來ない、身體の養生をしたり美味い物を食つたりするといふやうなことは皆な因緣であるけれども、如何に美味い物を食つて温泉に入つて居つても、女一人では子供は出來ない、必ず夫を要するのである、その夫となる者が了因である、斯ういふ工合に大涅槃經に於て、法華經のこの本佛と佛性の關係や釋迦如來が詳しく說明をせられた、この正因、緣因、了因の關係といふものを頭から離してはならんと迄言はれたのである。

斯ういふ事は話で聽くから大變難かしいやうに思ふけれども、丁度今の譬へのやうなもので、婦人がいくら達者な身體であつた所が夫がなければ子供は出來ない、『成る程』といふことは直ぐわかるでせう『そんなことはわかりません、夫などはなくとも子供は出來ます』といふやうな者は狂人である。法華の信者が如何に自分が佛性があつても、この佛性を啓發する力といふものは本佛の大慈大悲の感應である、自分が達者であつても子供を生むのは夫の力であるが如くに、自分の信仰生活に於て本來有つて居るところの佛性を現はす因果關係といふものは、即ち本佛の力であるといふことを說かない限りに於ては、一切衆生は救はれないといふことを壽量品に於て釋迦如來はお示しになり、日蓮聖人は『開目鈔』の中にこの義を明かにせられた。日蓮主義を信ずるといふことはこの點にあるのである。

その吾々が有つて居る所の佛性が覺醒めて現はれるところに信仰といふものがある。信仰は即ち本佛に對して起るところの渴仰感激であつて、本佛は吾等に對する慈悲の感應といふものを玆にお與へになるのである。どうぞして佛性を現はしてやりたいといふ慈悲の感應と、吾等の感激信仰といふものとが結びつく所に法華の信仰といふものはある。そこで佛は慈悲の方から五字七字の題目を留めて、汝等之れを守れ、我は汝が肉眼を以つて見える所に身體を置く譯にいかんから、言葉を留めて置く、南無妙法蓮華經のこの言葉を唱ふる時、我れそこに在りと思へ、汝の信仰はこの南無妙法蓮華經を通して告白をせよと言うて、題目は佛が自分の實在の證據として之れを留められたのである。題目の聲のある所、題目の文字のある所、佛そこに在りと思へよといふことは、丁度軍隊の聯隊旗みたやうなもので、陛下が戰場にまでついてお出でになる譯にいかんから、聯隊旗を授けて、聯隊旗のある所、陛在りと思へと仰せられるのである。であるから軍人はこの聯隊旗を見たならば、陛下ましますと同じ感じを以つて奮鬪

邁進するが如くに、本化の信者は南無妙法蓮華經の文字なり聲なりのある所、そこに本佛居ませりと信じて行かなければならぬといふことを懇々お說きになつたのである、それが法華經の一番大事な敎である。

だからそれを說かないやうな敎では眞の成佛は出來ない、成佛するといふやうな言葉があつたり、誤魔化しがあつたりするけれども、それは有名無實なりと日蓮聖人が言つたのである、その名有つてその實無し、即ち唯だ氣休めに過ぎない。佛樣に成れるとか救はれるとかいふことはみな言ふけれども、それは嘘である、氣休めである、さういふものに依つて救はれるものではない。それは丁度『御馳走を食べてさうして寢たならばそれで子供が生れますよ』と言はれて、いくら御馳走を食べて一人で寢たところが子供は生れないと同じ事で、本佛を渴仰せざる限りには絕對無上の佛性は現はれない。丁度日本人が皇室の有難さを考へなければ本當の大和魂は動かない、あとはどんな立派な淸い精神とか、大きな精神が動いても、それは普通の人間精神である、大和魂と稱するものは皇室の尊嚴に感激したる精神が加はらなければならぬ。法華經を信じて本佛釋尊の大慈大悲に感孚して、さうして目を瞑つた時に『ア、有難い』といふ感じがパッと胸に應へる、その精神の中に佛性を現はす力があるといふものである。

その敎でない限りには本當に人を救ふことは出來ない、丁度葦の葉の形が如何に舟に似て居つても、これは人を乘せて川を渡すことが出來ないが如きものである。この人を救ふといふことも、唯だ人間を良くするとか、人格を磨くとかいふ事ではない、本當は無限の生命を救つて成佛させなければならぬ。これは他の敎では出來ない、佛法も澤山あるけれども法華經、法華經の壽量品の本佛の敎義に於てのみ本當に救はれるものであるといふことを仰しやる爲めに『葦の葉の形は舟に似たれども浪葦の人を得こそわたさね』と謳はれたのである。

第三の

立渡る身の浮雲も晴れぬべし

たへの御法の鷲の山風

の御詠は、信仰生活の悅びを謳はれたので、それは即ち前に言ふ信心に活きて、さうして人格の完成も自から信心に導かれて、先づ不十分にもせよ一應は美しい生活を辿り、一應は苦みも少く、一應は悶えることもないといふ人生がそこに現はれて、さうして一方は成佛といふ悅びを何時も有つて居る。一度呼吸ひきとれば最後は佛樣に成ることが極つて居るのである。佛樣に成ることが極つて居ればモウ再び迷ふといふことはない。六道を流轉して居る限りには、如何に幸福なやうであつても亦落ちこみ、又落こみして行かなければならぬ、どんな立派な者に成つても死ねば又迷うて地獄に行くか畜生になるかわからない、どうしてもこの六道の流轉を脫却して常住不滅の佛樣にならなければならぬといふことに於いて、自分はその信念が決まつたといふそこに法悅が起つて來る。即ちこの御歌の現はれて居る『身延

山御書』の中にも、女でも男でも如何なる罪深い者でも、法華經を信ずれば成佛疑ひ無しといふ言葉を擧げられて、その成佛の決定といふことから法悅を謳はれて居るのである。唯だ信心をして嬉しい、娑婆即寂光だから嬉しいといふことを言つたものではない、『是の人佛道に於いて決定して疑ひあること無しとはよに〳〵親母しく候へ』といふ所からその成佛の事柄を思ひつゞけて見れば、身延の山が如何に淋びしからうが、眼に入るものはどうあらうとも、心の歡喜を以つて活きられるから、そこで身延山の住居はまことに幸福なる樂土となつて

哀れを催ふす秋の暮には草の庵に露深く、檐にすだく蜘蛛の糸玉を連ぬき、紅葉いつしか色深うして たえだえに傳ふ懸樋の水に影を移せば、名にしおふ龍田の河の水上もかくやと疑はれぬ。（身延山御書 遺文一二九七）

帝釋天の喜見城もかくやと思はれるといふやうな、實に無限の法悅力といふものがそこに現はれて來るのである、それでなければ本當の宗教生活ではない。さうして『立渡る身の浮雲も晴れぬべし』で、今迄自分の身體には或は罵詈、或は讒謗、或は迫害、いろ〳〵な苦みが殆ど天に滿つる雲の如くに蔽うて居つたけれども『たへの御法の鷲の山風』この法華經の信仰に依つて浮雲を吹き拂うて、清風一陣吹ことに麗らかなる生活に入ることが出來るのである。日蓮聖人の身延山の御生活は決して物質的に言へば十分なものではなかつた、まことに狹い所に淋しい生活をして、雪が降れば人も絶えて實に淋しい御生活であつたけれども、聖人は法悅に活きて斯樣に歡喜をお謳ひなさつたのである。

それでその法悅の爲めに『身延山御書』といふものは、法の有難さを非常に强く謳つてある、或は大國の國王が法を得るが爲めに千歲阿私仙人に仕えて法を得たる歡喜、或は帝釋天王が狐から僅かの法を聽いて非常に喜んだこと、その他藥王菩薩は法の爲めに臂を燒き、雪山童子は身を棄てゝ法を求めたといふやうな事柄を玆に掲げられて、さうして末代の今日に於いて斯樣な結構な教に近付き得たといふことの法悅を極度に高唱されて居るのである。現在の人はこの法に遭ひたてまつる所の難遭の思ひといふものが足らないのである、法華經の教であらうが天理教であらうが大本教であらうが、何でも同じ樣に考へて居る、さういふものではない、あんな狂氣のお婆が考へついたやうな言葉は、何時でも出ても來るし、何の値打もないものであるが、釋迦如來が一代藏經を說いて、殊に法華經に於て說かれたやうな最高完全な教義といふものは、世界全人類を通じて如何なる哲學者、如何なる宗教家が出て來ても、誰もこれと同じ樣な意味合ひを說くことは出來ない。世界の宗教がいくら在つてもそれ等はまるで値打がない、實に佛教は卓越したる所の立派な教である、その教の中の最第一の御教として法華經の眞實をお說きになつた、それを日蓮聖人のやうな偉大な人が生命にかへて吾々に御紹介下さつたのである。

昔から斯ういふ場合の事を譬める言葉として面白い話がある。お父さんが非常な艱難辛苦を嘗めて永い航海を辿つて立派な珠を得て歸つて來て、さうしてそれを床の間の上に飾つて置いた、所がそれは赤いのもあり青いのもありまして、洵に綺麗な珠である。その家の子供は生れた時分からしてその珠が床

の上にあるものだから、その珠の値打といふものを知らない。段々大きくなるに從つて元からそこに在つた珠だと思つて、お父さんが居なくなると椽側に持出して、ゴロ〳〵轉がして遊んで居つた、その內にそれが椽から轉がり落ちて、石に當つて疵がついたけれども、その子供は何とも思はないで平氣で居つたといふ話がある。吾々は丁度それと同じやうに、生れた時に既に法華經が日本に弘まつて居り今日に來つて居るから、何とも思はないで居るけれども、日蓮聖人が日本にその敎を弘める爲めにもどういふ艱難辛苦を嘗めて居るかといふことを考へれば、決してさういふ簡單なものではないのである。又今の世と雖も正法正義を有の儘に敎へる人はさう澤山はない、東京にも婦人會とか修養會とかいふものは澤山あるだらうけれども、唯だ好い加減の話をする者は山ほどあらう、併し釋尊の出世本懷の思召を眞實に傳ふる所の會合といふものはさうあるべきものではない。幸にあなた方は正法正義に緣あつて、所謂因緣因果の理で、それだけの好き果報を以つて此處に集ることを得たことをよろこんで、そこに法悅歡喜といふものが起つて、自分にはいろ〳〵幸福のことも不幸福のこともあるけれども、その中で斯ういふ結構な御敎に入つて信仰することになつたのは自分の幸福の中の一番大きなものであるといふことを悅んで『立渡る身の浮雲も晴れぬべしたへの御法の鷲の山風』といふ法悅の題目を唱へる所に、宗敎生活といふものがあるのであります。

斯の如くこの三首の御詠はまことに意味ふかいことゝ考へます。今日は時間の關係上十分に說き盡すことは出來ませんでしたが、今までお話したやうな意味に依つてこの御詠の精神を十分に味はれることを希望するのであります。（完）

東西文化の本質的絕對差異を提唱せよ

二木謙三

御中主主義と多數決主義

外國人にも日本人にも斯うした間違がある、日本國も一つの國で、外國も亦國、日本人も人で、外國人も人である以上、其の間に大差のあらう譯がない大體似たり寄つたりで行き得るものであると思うて居る人が多い樣である。其れが根本的の間違であることが能く分らぬと、其れから其へと萬事が間違つて行くのである。

日本と外國とは木で譬ふれば梅松竹の異なれる如く、根も異なり、幹も異なり、葉も異なり、花も異なり、實も異なり、養ひ方も異なり、用途も異なり何所一つとして同じ所はなく、似た所もないので、互に眞似も出來なければ、代りも出來ぬのであると同樣で、日本と外國とは何所から何所迄も異なつてゐるので、ウツカリ日本が外國の眞似をしたら、松の葉を取つて竹の葉を附け、梅の花を裝うたと同じで、其れは最早松でなくなり、又松其のものも滅亡に入るのである。日本人は其れに能く氣が附いて居るであらうか。ウツカリすると歐米の葉を附け花を飾つて其の枯れる松になりつゝあるのではなからうか。

其れでは日本人は汽車にも乘れぬか、自動車も使はれぬか、電話もかけられぬか、其れが出來るのは皆外國の眞似でないかと云ふ人も出るかも知れぬが其れは日本國や日本人の本質から見れば一種の外物に過ぎぬので、例へば梅の枝に短冊をかけ、櫻の木に赤い幔幕を張つたと同じであるから、本質には大

害のない譯であるが、其れでも尙ほ映畫や、ラヂオや、戀愛小說、探偵小說等が濫りに外國物を取り入れると敎育上甚だ宜しからざる影響を來すこともあり得ると同樣に之にも多大の注意を要する。然らば外國と日本、外國人と日本人と本質的に如何なる差のあるかを明らかにする必要があると思ふ。固より外國と云うても國が多いから唯其の大體について云ふだけで、其外國相互間の區別は玆には觸れない。

第一國の成り立については外國は大體異民族が群集集團して國家又は社會を組織して居るのであるが日本は天孫民族たる唯一民族の祖先から傳はつた子々孫々が繁榮して一大家族を造つて居るので其直系の御子孫が皇室であつて、吾々臣民は皆其の分家別家の末孫であるといふ點が日本は外國と違つて居る元首は外國では或は征服者であるか又は被選擧者である。征服者である以上は被征服者たる不滿の分子も國民中にある。又被選擧者である以上は競爭者落選者の殘黨が國民中にある譯で、心からの擧國一致は得られない。私かに回復を計るものや次回に競爭の計略を企つるものもあると見るべきで、日本は之に反して擧國一致、皇室の御繁榮は取りも直さず國民全般の繁榮であるので、之に應じ其の他萬般を通じて外國と異なれる事情が現はれて來るのである。

日本民族の起源は古くして知るべからず。歷史は御中主神に始まると雖ども日本民族の起源は其の以前既に巨大數の年限を經過して居り、又御中主神以後伊佐那岐神に至る迄又多大の年限を經過して居る筈で、唯甚だ有名なる君主神の御名號のみ人間の記憶に殘存したるものを見るべきである。而して伊佐那岐神以後は歷史に比較的明かに記されて居り、更に神武天皇建國以後は一層明瞭であるが、尙ほ其の後に於ても人間の記憶に脫漏せる幾多の事實ありと見るべきである。

人或は御中主神を以て抽象の神と看做すものありて、余も亦以前迄其の如く考へたりしが、最近に至りて余は其の實在の皇祖の御一人なることを信するに至つたのである。

古史に『天地初發之時』とあるのを天地開闢の時と解するが常であるけれども、其は外國の創世紀に於ける解き方で、日本では日本の說き方があると思ふ。其は人智蒙昧の時代には天地はあれども人は天地の認識が確かでなかつた。恰も微生物が人體に寄生しながら人體を認識して居らぬ如くである。其れが御中主神の時代には大和民族の智識も進んで天地と人との智識的交涉が開けて人は始めて天地の存在と、天地と人との交涉を明かに認識する樣になつた時に此の如く申すことで、其れ以前は天地あつて全く無きが如くであつたと見るべきである。其の時日本にて『高天原』にと申すは、天は最敬語で唯元首神にのみ用ひらるゝので、日本の島の高原に、即ち神都であつた高原にありませる民族直系の神の御名は天之御中主神(前述)と申し上げた。即ち高德の御方で多くの民草が其の四方より集まりて其の御德を慕ひ、神は人民の眞中に君臨せられて仁惠を施されたと申すことで、其の神の御名其の儘が神の無限の大德を、誰申し上ぐるとなく唱ひ傳へられたものと見るべきである。其の後日本の一切が御中主主義で通されたので、今日と雖ども其の御中主主義で行かるべきである。之れが日本の外國と異なる點で、又其れが最大で且つ最小に至る迄、最初で又最終に至る迄、總べての相異點の根本であらねばならぬのである。

御中主主義と申すは、物には必ず中心あり、中心確立して肢體其の安きを得るが如く、國には元首あり、御中主主義で、官衙、學校、工場に至る迄皆其の長あり、家族には家長あり、人には良心あり、各々其の長者又は良心の命令に從つて誠に其の分を盡すの謂で、上は慈に下は順に、孝悌忠信の亂るゝことなく、廢ることなく、天地を極め、東西を通じ、悠久に亘りて息むことなく行はるゝを謂ふので、單に其れは理論でなく實行を謂ふのである。斯くして外國は元首、大統領、大總統の更迭あるに際しては多數決を用ふるが、我には萬世一系不易の天皇あり多數決を用ふることなく既に御中主として定まり、彼には變轉常なき物質本位の習俗あり、我には萬古不變の精神主義あり、彼には飽くことなき個人の自由の要求主張あり、我には國家の自由の爲めに個人の犧牲提供あり、彼には男女の自由解放の要求あり我には夫唱へて婦隨ふの道あり、彼には爭奪の相對戰あり、我には遜讓の大道あり、彼には選擧によれ

る多數決任用法あり、我には絶對命令的任用法あり彼は慾と食と富との目標に向つて猛進し、我には鏡璽、劍の標識あり、彼は祭政其の趣向を異にすれども、我には祭政一致親祭親政あり、彼には元首と民衆屢々民族的別系なるものあれども、我は君民同族一體なり、彼は神人別個なれども、我は神人不二にして神は過去に於ける我々の實在の祖先にして我々は現在に於ける神の子孫である。

然れども翻つて考ふれば現下の狀況にありては我にも勞資の爭議あり、御中主主義必ずしも行はれず議會には黨爭あり、又學府にも上下の爭議あり、町村議員の爭奪戰あり、運動には對校競技あり、衣食住には外國模倣あり、思想にも又外國思想の流布あり、總てが多數によつて制せられんとしてゐるが、唯御中主主義にして命令一呼死生を省みざるは軍人精神一あるのみ、其の他は皆何れも松に向つて梅を裝ひ竹の直きを捨てゝ松に扮せんとするが如き外國模倣にして、自他共に破滅の淵に臨まんとして居る今にして醒覺せずんば其の何れの時を待たんとするか。而して其を醒覺するの道は他なし、全國民をして內外其の本質的文化の異れる所を明示して、神の國日本の本態を徹底的に知らしむるにあるのである

神の國日本

『神の國日本』とは何と云ふ事であるか。其は『雪の國越後』『瑞穗の國日本』と申す如く神の多い國、到る所に神の在す國と申す事であるか。否其れは當つて居らぬ。其よりは『私の本』『君の杖』と申すと同樣、所有の主體を現はす意味で『神の所有に屬する日本國』と申す義と見るが至當である。神武天皇の橿原の宮を建つるの令に『上は天つ神國を授け給へし德に答ひ』とあり、又明治天皇御製にも『神のかためしわが國を』『神の御代よりうけつげる國』『神の定めしうらやすの國』『天つ神定め給ひし國なれば』等とある如く神の御所有、神の御支配の國と申す義と見るべきである。

此の神の國日本は天照大御神より代々の天皇に授け給うた。新帝の御即位には又新たに神より新帝に授け給はるので、日常遭遇する事柄と違うて居る。例へば人から自分が貰つた時計を自分のものとして又自分から之を誰かに與へる關係とは全く別である御即位の其の都度必ず新たに神から新帝に御授けになるのである。御即位式に於て賢所を京都の御所に奉戴するのは其れが爲めである。昔あつた稱德天皇より僧道鏡に國を讓らんとする等の事の決して出來得べき筋ではない。斯くして眞に神の所有の國日本であることを百萬世の後迄國民は忘れてはならぬのである。此の國は神の國である以上之れは誰人の私所有でもない、大地主や財產家のものでもない。假に日本が貧乏になつても決して國を賣つてどうするのと云ふことは如何なる場合に於ても絕對に許さるべきことではない。況んや一寸の土地でも外國に奪はれたとしたら日本人は暫しも晏閑として見て居る等のことは有り得べきものではない。從つて又各自が所有を許された土地と雖ども必ず之を有意義に活用さして天意を空しうせざる樣注意せなければならない。徒らに之を荒廢に歸せしむる等の事は許されない。一切が神の國、神の土地、神の財寶であれば一物も勿體ない、天物を暴殄することがあつてはならぬ。此の點も外國人が考へて居る土地財產所有權の觀念とは大に異なるのである。諸外國に於ては國は國民の共有で各自の所有權は絕對に何人からも侵さるゝことなしとせられて居る。日本人は之に反して動產不動產の一切を何時なりとも之を神に御返上するの覺悟を持たなければならぬのである。之れ又大に日本と外國との異なる所である。

然らば神とは何であるか、之れ又諸外國の神、佛ゴットと其の本態を異にして多くの場合には大和民族の御祖先皇祖皇宗即ち天御中主神又は天照大御神を指さるゝものである。明治天皇の御製中にも『遠つみおやの神のをしへを』又は『みおやの神のみ惠にして』等とある如く御祖の神であらるゝので、敢へて天地創造の神、天地主宰の神又は全知全能の神等の抽象的の神でない。全く具體的の御祖先の神である。吾々人民が特に御親しく又御近しく感ぜらるゝ御方である。之れも又日本と諸外國と其の趣きを異にして居る。

故命捨身

其れであるから日本軍人は昔も今も戰場に出る時

は親も子も妻も兄弟も田も畠も金も家も全く顧みることなく、力のあらん限り生命迄も何に惜げなく全部君に捧げて、天皇陛下萬歳と叫んで死に行くことが出來るのである。日本人の中心生命の中には一切が之れ神のものと、國民誰れ彼れの區別なく皆潜在的に意識して居る。諸外國では財産も我がもの、生命も我がもので、誰の爲めに捨てゝよいと云ふことはないのである。日本では古い昔から之に反して『海行かばみづくかばね山行かば草むすかばね、大君の邊にこそ死なめ、顧みはせじ』、又は『今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は』と云ひし如く、全く何物も捨てゝ顧みないのである。これが日本の長所であつて、外國の到底眞似も及ばぬ所である。

神人不二、君民一體

次ぎに前述の如く諸外國には神と人とは全く別物であるが、日本に於ては人は皆親の子であると同じく、吾々人民は皆神の子で、父子一體、神人不二である。之れは諸外國には見ない所である。從つて人は神の子孫にして君は神の直系の御子孫であらせらるゝにより君民一體不可分である。然るに諸外國では君民往々別氏族又は別民族で、又往々征服者と被征服者の關係にある。又支那には君臣水魚の交り等の語があれども、親しいと云へば親しからざることもあり、睦しいと云へば不和のこともあり得て、其れは相對關係になるが、日本にありては君臣全く不可分同體で、即ち絶對關係にあるのである。外國には其の例を見ない。

祭政一致

近來所謂政治運動なるものあり、黨を結び派を作り、政權を目標として其の爭奪に狂奔して居る。此の如きは之れ即ち外國流の政治運動にして日本の政事ではない。國民深く之を猛省せなければならない然らば之を革正するの道は何ぞ。日本は親祭親政の國であることを悟得すべきである。

日本の祭政一致と申すことは祭即ち政、政即ち祭で、祭りも政も一つであると云ふのである。祭りとは何を云ふかとなれば、其は背かぬことである。背くとは背を向けることで、背くの反對は大和言で『マツロフ』と云ふのである。其の語原が目連合フで其れが詰つて『マツラフ』『マツロフ』となり、之れが更に詰まつて『マツル』となり、其れの名詞が『マツリ』である。即ち祭りと云ふことは背くの反對で互に向ひ合ふことで、尚ほ具體的に申せば目と目が互に連れ合ふことである。彼我の視線が一線に合致することである。斯くして上に向つて神を拜むことが祭りで、又下に向つて民を視ることが『マツリゴト』で即ち神人相背かぬことが祭りで、君民相背かぬことが政である。其れが爲めには種々の儀式や供物があり、又人民には衣食に窮せぬ樣根本方策を授くること等が其の細目であるが、根本のことは互に相背かぬことである。今日の政治家なるものは互に結黨して倒閣を目的として互に相爭ふが如きは即ち相背くの政である。外國ではそれでよいが、日本では其れでは行かぬのである。御即位の御大典にも大嘗祭は天皇御親祭で、悠紀主基の御祭典の後に大饗宴を御催しになるは即ち親祭親政の事始めなのである。其所で日本が外國と異なつて元首は民人の統帥者たるに止まるものでなく、皇祖皇宗と人民子孫末代迄の間の扇の要めの御役をせらるゝもので諸外國には其の類がない。

道の國日本

『道の國日本』とは何であるか。支那には儒教、印度には佛教、歐米には基督教あり、獨り日本のみ道の國たる理由なきが如しと云ふ人もあらう。然り各國皆其々道はあれども天地の公道を體して之を事物に實現しつゝあるのは獨り日本のみである。

即ち日本に於ては國家社會大小集團の組織は皆前述御中主主義で、國に元首あり家に家長あり人に良心あり且つ其れが萬世一系的である。外國に見るが如き交替統治ではない、恰も天體諸遊星に皆其々中心軌道ありて永遠性を有すると同じ。又日本には父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序ありで、例へば人體の頭身手足各々永久に其々別序あるに同じい。決して自私的自由平等解放放縱ではない神人不二、君民同體、祭政一致、舉國一體である。恰も根幹枝葉花實種苗總て之れ一體なるが如し。或

は佛教を入れ、或は儒教を用ひ、或は基教を許して其短を去り其の長を採り之を同化し、或は歐米物質學の長所を採用して今や出藍の譽あるに至りたるが如く、又濫りに攻めず濫りに戰はず、而して戰へば必ず勝ち攻むれば必ず取るが如き、明治以來六十年の短日月で今や世界の驚異する所となるが如き、決して偶然ではないのである。道の國日本なればこそである。然れども今や歐米の短所も亦混入し來り、或は物質主義に或は享樂主義に將に深坑に墮せんとするの徴なきにあらず。然りと雖物極まれば必ず轉ずる。吾人謹んで慢することなく誠に小心に道を誤ることなくば、神明の加護によりて又復舊の望みなきにあらず。之を道の國日本となす。是れ又世界の各國と異なる所である。

大和の國日本

大和の國日本とは何ぞ。ヤマトはイヤマトにしてイヤとは『彌々益々』なり。マトとは圓居、圓圍、經なる等のマトにして大圓圍の國、即ち上下照合學國一致爭なき國・浦安の國日本と云ふことにて、年立てば立つ程、人が殖えれば殖る程、國が大となればなる程彌々益々經まる國日本と云ふことである。即ち單なる平和の國ではない、單なる平和ならば今日平和でも明日大亂とならぬとは限らぬが、日本の平和は唯の平和でなく、今日より明日、今年より明年と彌々益々平和の進む國、即ち大和の國日本と申すことである。大和魂と申しても亦日本を大和に導く魂なるが故に苟も亂徴でもあることならば武士は身を挺して其の亂を平らげる。之れも大和魂の發現である。然るに誤つて大和魂とは尚武の精神で日本は好戰國なりとなすは認識を缺けるものである。大和魂の本態は單なる武力でなく、大和を目的とした る正しき武である。大和の國日本之れも世界に其の類を見ざる所である。吾々の明治以來外に向けられたる視線を、今や內に向けて日本の眞文化を研究せなければならぬ時が來たのである。

——東洋文化——

釋尊の悲智に感孚して

はしがき

最近ある方に勸信の小冊子を一二冊お贈り致しました處が、その御禮狀の末尾に、

毎日拜讀させて戴いて居りますが、なかなか面倒でわかり兼ねます、何時になりましたらば腹にたまりますことやら、一語々々かみくだくになかなか暇がかゝります。

云云と記されてありました。本誌に於てもその一部分は成るべく平易にと心懸けて居ります。そこでこゝには出來る丈け通俗的に、又た簡明に釋尊の悲智一體を拜記して入門の方方の御參考に供しませう

近頃は要路の人々の間に、思想は思想を以て善導せねばならぬといふことで、夫れ々々適當の機關を計畫し設置されんとして居りますことは極めて緊要のことと存じますが、そこに一つの注意すべき點は「今まであまりに唯物的であつたからして、今度は精神文化に引戻せば」といふやうな簡單な考へであれば、矢張りそれは釋尊の誡められた「常見の外道」に陷るものではないかと危ぶまれるのであります。

正しき宗教のない教育は、智慧ある惡魔を造るといふ言葉は極めて穿ち得て妙ではありませんか。今更ら私共が宗教の眞價を云云する必要もない位であります。

礒部滿事

佛教の偏見

そこで宗教とは、世界廣しと雖も實に佛教に勝るものはないにも不拘、佛教程又誤解されて居るものはありますまい、これを一言致しますれば、小乘教ではこの世の中は厭ふべきものであるとして、我がものがあると思ふのはいけない、無我に一致せよ、無我の境に到らうとするには家を捨て、世間を離れ林野に籠つて此身を捨て、一日も早く空寂の涅槃界に入らなければならないと說き、畢竟人生仲間を脫して特別の生活に移らねばならないとの思想が行はれ、人の世は過去より未來へ通る一夜の假りの宿、雨降らば降れ、風吹かば吹けと云ふて自棄して現實の社會を厭つたものでありますが、これは釋尊の御眞意でないことは明かなことと思ひます。或は又佛敎が、本來無東西だとか、本來迷悟なしだとか、佛は何ものぞ、佛は虛空の如きものであるとか謂ふて、虛無を憧がれ、そこに悟道ありとしたやうなものを高遠な敎であると思ふ人もありませうが、實際深く考へて見れば絕對の知見としても未だ盡さない所ある上に、それは獨善的に墮ちて現實の國家社會に直接の交涉は極めて薄いことになつて居ります。或は佛は法界の實相を御悟りなされて居る、我々人間もこの實相に合一し到達せねばならぬといふのでありますが、斯やうな絕對の智慧を渴仰することは元より高遠で偉らさうでありますが、過ぎたるは猶及ばざるが如しで、實際社會と懸隔があり過ぎて人生の救ひには迂遠に流れる傾があります。又ある者は此の現實世界の敎主釋尊それは無始常住の主師親三德有緣の本佛で在ますことを捨てゝ却て緣の無き他界の佛にすがらんとする如きは悉く其道念の根本が破ぶれることになりませう。斯かる謬見を知らうと思へば、釋尊の御心は如何なるものであるかを知るならば、自ら是正さるゝこと、思ひます。

佛陀の御心

釋尊の御心は慈悲に汪溢し、智慧に充實されて在しますが、結局は智悲一體と申しても慈悲が根本になつて居りますことを先師は申されたのでありますその慈悲はこの人生社會を救ひ給ふことと、而して未來永遠の濟ひとが含まれて居ります、釋尊の大慈悲海中には、私共の過去も、現在も、未來も御救ひ下さるその大慈悲が晝夜間斷なく注がれて居るのであります。法華經には『作す所の佛事未だ曾て暫くも廢せず――毎に自ら是の念を作す』『又は諸の衆生、是の法を聞き己つて現世安穩にして後に善處に生ず』等と其御心が明されて居ります。

悲と智

釋尊の慈悲と智慧に就いて少しく述べますれば、先づ其の智慧の側から拜するに、佛敎を除いた有ゆる宗敎對象の智慧は、未だ盡さない所があります。獨り佛敎は天地法界を觀ることも、自己の現在及び未來を論ずるに就ても、極めて哲學的に眞理を示されて居ります。釋尊の智慧は『一切種智』と申してあらゆるものの因果關係を悉く照知なされて居ります。「神は愛なり」といふ愛も、この大知見を通して來た愛でなければ、その愛は眞實の結果を來さないのであります、單なる世間的の智慧、又智慧の欠けた愛、これは俱にほんとの價値はありません。故に慈悲と申しましても、大知見と合體して活動して來る大慈悲でなければ、如何なる愚劣蒙昧な者をも救ふといふことにはなりませぬ。されば儒敎の仁であつても、クリストの愛でもが、それは尊いには相違ありませぬが、之を公平に批判する時には、遠く佛陀の悲智一體の大慈悲には及びませぬ、かく釋尊の慈悲や智慧は絕對圓滿なものであります。

『佛心とは大慈悲心是なり』と申して、縱には過

去、現在、將來に亘り、横には十方の世界を貫いて大慈悲に充ち滿ちなされて、とても私共の言語も絶へ、思慮も及ばぬ尊いものであります。

念佛宗の人々の有難がつて居ります觀經に說かれたかの韋提希夫人を救はれたことに就ても、それは阿彌陀佛の慈悲といふよりも、寧ろ釋尊の慈悲と其智慧に感激致すべきでありませう、何故なれば、印度に御降誕遊ばした釋尊すら智慧の結晶體であり、慈悲の體現者であります、況んや法華經如來壽量品に明された本佛釋尊の大智慧、大慈悲は無量無邊で限りなきことを思ひ、而して其の本佛釋尊が身と口と意に於て私共を化導して下さつた廣大な御德に到つては筆舌のよく及ぶ所ではありませぬから經には『世尊は大慈ましまします、希有の事を以て憐愍教化して、我等を利益したまふ、無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん』と、御弟子達の讃歎も果して完全に盡し盡したと申されませうか。

更に慈悲と智慧との關係を拜するに、法華經の迹門には智慧を表とされ、慈悲を裏にして說かれてありますが、本門には智慧を慈悲に捲き込まれて活用されてあります。

故に如來壽量品には智ある者よりも愚な者、優れた者よりも劣れる者、强い者よりも弱い者、健かな者よりも病める者をば救ふことを本旨となされて居ります。有名な醫師の譬、即ち父なる良醫と、良き藥と、惱める子供との關係でお示し下さつております。

私共毒思想にかぶれて惱める子供が、釋尊を慈悲ある父にして而かも良き醫者であると信じて救療を求めた時に、慈父は愛子等の中に本心を顚倒し、少しも父の言葉に耳さえかさない淺はかな不孝の狂えを子供も、どうかして濟はんと一大刺激の死といふことで其氣持を轉向せしめてからこの良藥、則ち八萬四千の澤山の教草から搗き捏ひ和合して淘に服用し易き一粒の丸藥、妙法蓮華經とされてのませてやらうといふ有難い親の慈悲が、聲と文字になつて與へられ、吾々の耳と眼から救はるゝのであります

餓え渴したるものには先づ衣食の救ひは必要でありますが、社會は樣々であつて物質には不足のない富者でも心には惱みはありませう、地位名望高い顯官でも精神には人知れぬ煩悶がありませう、貴につけ、賤につけ、財ある者、無き者、若きも老たるも男も女も、有ゆる階級を通じて人類衆生には悉く大小の差こそあれ皆等しく心に懊惱を懷いております

「人生は苦なり」『三界は火宅の如し衆苦充滿せり』と仰せられた一語は寔に現實の世相を穿たれた金文であります、この悲慘な人生社會を悟りの慈眼から觀せばどうでありませう。『我諸の衆生を見れば苦しみの海に沒在せり』と仰せられて、そこに釋尊の大慈大悲の御心は躍然として燃え上り智慧の應化はお救ひの網たる妙法蓮華經となつて投げられます。吾々御佛を渴仰し、嘉ふ恭順の者等は、本心の目覺めから漸くわが眼と耳を介して教化に浴し精神に法悅を感ずるでありませう。寔に『信心を運び、渴仰を致さば、遷滅無常は昨日の夢、菩提の覺悟は今日のうつゝなるべし』で、此時始めて救はれたと申すのであります。

それは恰度小さい幼童が學校に通つて、先生が黑板に文字や書をかき、更にお話をされることに依つて漸次教養感化されて行くやうに、遠く釋尊は吾々の眼耳意の三根に對して、かゝる聲と文字を應用して救ひの大教を與へられました、それも世相は彌々險に、益々スピードアップするが故に要中の要として哲學的の眞理も、道德的の善も、宗教的の美も包まれた妙法蓮華經の五字一音に結んで遺し置かれたのであります。

されば南無妙法蓮華經は單なる文字ではありません、南無妙法蓮華經は單なる音聲でもありません、

其の文字なり、其言葉なりが直ちに神通の力を有つて居るのであります。日蓮聖人は『妙法蓮華經と申すは文に非らず、義に非らず、一經の心なり』と屢々仰せられて居ります。又觀心本尊抄には『釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等この五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り與へたまふ』とも仰せられた意義は洵は深長であります。本佛釋尊の身、口、意三論の妙化から出た妙法蓮華經のエッキスこそ大きな御救ひの力用を有つて居るのであります。

信仰の力

釋尊の慈念に渇仰を生じ、釋尊の人格に憧憬を持つ以上は、必ず本佛の不可思議なる教化として與へられた妙法蓮華經を信ぜねばならぬことになります即ち法華經の法師品に說かれた通り『我が說く所の諸經、而かも此の經の中に於て、法華最も第一なり』乃至『已に說き、今說き、當に說かん、而も其の中に於て此の法華經』こそ佛の秘要の藏であり一代に超過せる教であることが事實とすれば、又佛教に於て其の教主たる佛陀の眞實相を拜する上に、如來壽量品に教詔された事が間違ひないとせば、釋尊は一切衆生の父であり又『唯だ我れ一人のみ能く救護をなす』則ち人間並に天上界の主であり、開導の師であることに異論はあるまいと思ひます。そこで『仰ぐ所は釋迦佛、信ずる法は法華經』といふこの信念渇仰のある所、遂に御佛に同化するに至るべきでありませう、設少分であつても、微分であつても同化すれば、その活力はやがて積極的に善をなすべき精神となつて現はれて參るべきであります。正しき信仰の報として精神に安心立命の歡びを感ずる者は大集經に『喜べば則ち勇猛にして能く善をなす』と仰せられたやうになります。世間では子を持つて知る親の恩と申して、御佛が有難いと申しましても、自ら世の爲め人の爲めに活動し、苦勞して見なければ、佛樣の慈悲を感ずることはどうしても薄いものであります。『一切衆生の異の苦を受くるは、悉く是れ如來一人の苦なり』と　釋迦如來の大慈悲に感憤せられた時、日蓮聖人は『一切衆生の一切の苦を受くるは悉く是れ日蓮一人の苦と申すべし』との大慈行願の源となつたのであります。宗教が理窟張つて居る間は感心する程のことはありません。自己の肉となり血となつて體驗の上に温い情操となつてこそ眞の感激は生ずるでありませう。日蓮聖人が建長五年の春から弘安五年の秋に至る三十年間、又他事もなく、慈母の赤兒の口に乳を入れんと勵む慈悲を以て、吾々に妙法蓮華經の良藥をお勵め下さつた菩薩の行願は何を物語り、何を示されて居るのでしようか。

『日本第一の智者となし給へ』と祈られ、『大智慧の者ならでは、日蓮が法門分別し難し』と叫ばれたり、智慧法然と稱へられた法然上人さへ、彼のいふ如きことは日蓮十七八歲の頃より知つて候と迄智慧門に於ては無類秉切り比肩する者のない日蓮聖人もかの無數の連續的の迫害法難、殊に三ケ年寒風凜烈骨をさす北海佐渡の忍難にさえ、『今生の小苦』とし『未來には大樂を受くれば大に悅ばし大に悅ばし』との法悅に安住し、志念の堅固であつたことは何處から湧き出したものか、是れ皆末法劣れる者を救濟せんづ慈悲の全身に充ち溢れたるより致された所謂慈悲中堅の御活動が、一切の迫害も、積る雪もとかせたので、宗教家の活躍は皆慈悲の根元から發生し來るものであると確信致します。

天台大師が、釋尊をば智慧の方から見んとされ、日蓮聖人は、智慧を慈悲に捲き込まれた大慈悲の人格常住の御佛を敎へられました。智慧と慈悲、天台と日蓮、互に相對照する時に幸ひなる哉私共はある尊いものが握られませう。眞宗の一高僧が、日

蓮聖人の『報恩抄』を手にして、『日蓮が慈悲曠大ならば』の一句に到つて「これある哉」と感歎されたさうであります。恐らく日蓮宗の今後大に發展するには決して四個格言の折伏的でなくして、『鳥と蟲とは泣けども涙おちず、日蓮泣かねど涙ひまなし』のあの慈悲の聖人が、世間に知られた時と思ひます。

本佛釋尊の御使として末法に遣はされた日蓮聖人が佛識の通りの菩薩行を遊ばしたことを思ふ時に、一段と强く　釋尊を渴仰し崇敬し、その　釋尊の大慈悲力、善根力、功德力の結晶である妙法蓮華經の五字七字を信受する人々の幸福は、千萬金にも換へ難い喜びであります。宰相大將にも換へ難い喜びであります。『天台の座主よりも、南無妙法蓮華經と唱ふる末法の窮人とはなるべし』の法悅觀は何とすさまじいものでありませんか。一度かゝる意識ある信仰に入るならば、釋尊の慈悲の御力用を受けて、生きとし活ける此の人生社會の總てが、現在も、未來も共に救はるべき信仰となります。この妙法は慈雨のよく三草二木の蒼生を潤ほすものであります。

私共の救はれることを米に譬へますれば、單に實が出來るといふのではなく、花も開き而して實も結ぶやうに、人生五十年七十年の上に、世間の樂といふ花開き、而して涅槃の樂といふ實を結ばしむるのが、御佛の慈念であらせられます、人生の救濟は之を華報と云ひ、未來の成佛は之を果報と云ふのであります。

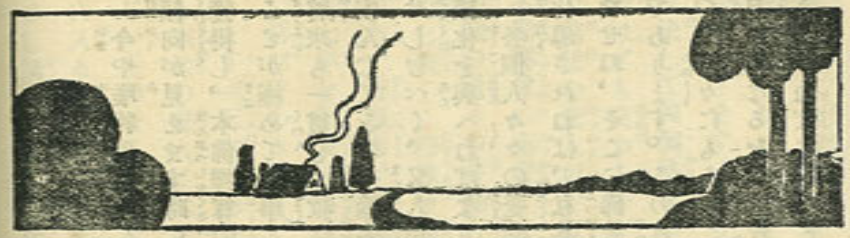
ある人達の間に、佛敎が特に日蓮宗が現世利益を主張し、未來を輕んずるやうな言葉を用ゐますけれ共、日蓮聖人は有名な立正安國論にも『先づ生前を安じて、更に歿後を扶けん』と示されたのは、佛敎徒としての本領を指された聖訓であります。現世安穩、後生善處は法華の有難い大事な點であります。

むすび

今や唯物萬能から醒めて、精神的に歸らんとする傾向が見えます時に、吾々日本國民は佛敎の眞意を獲得し、本佛釋尊の慈念を自分共の軌範として進むことが極めて大事と思ふのであります。即ち現在も將來も一貫して救はんとさるゝ御手に攝取されて、安んじてこの苦惱多き人生社會をば平和安穩に轉向せしむべく、又人類死後永遠の完成に就て熱誠なる感化を與へねばなりますまい。

各個人々々の覺醒は成されても、國と國とが共に化導されねば、私共は安閑として過ごす譯には行きませぬ、そこに佛敎の轉輪聖王の思想が貴ばるゝのであります。この實證が大日本帝國の上にあり、從つて吾々にもあることを知る時に、お互の責任の重且つ大なるを痛感致すと共に獻身的に御奉公致す樣心懸けねばならぬと思ひつゝ、胸を跳せ乍ら靜かに筆を擱きます。

南無妙法蓮華經



解放欄

一冊の本から

「吉田松蔭」を讀みて

上田辰卯

嘉永七年吉田松蔭は米國渡航を企てゝ成らず、遂に巡邏に捕へられて幕府の牢獄に投ぜられた。下田の牢僅かに一畳を敷くと云はれてあるのを見ると如何に當時の牢屋なるものが狹苦しい陰慘なものであつたかが想像出來る。松蔭先生もとより身に一點の私心なく、唯一途に天下國家を憂へての餘りであるから、この悲慘なる牢獄の生活の中にあつても心身衰へず意氣正に天を衝くものがあつたことは勿論である。焰の如き熱情を吐いて日本の國體の尊い所以、人の人たる道を說けば、心無き獄卒等も心魂を傾けて感じ入り、初めは吉田々々と呼びすてたものが、吉田氏となり、遂に先生々々と仰いで悉く皆師事するに至つたとのことである。下田の獄にあること月餘、先生は同志澁木松太郎と共に江戸北町奉行の手に移さるゝ事となつた。足にはほたを打たれ、身に荒縄をかけられて軍鷄駕籠に乘せられて三島から箱根を越えて東海道を引かれ行く姿は、今でこそ芝居と云へば芝居、戯曲と云へば戯曲とも云へやうが、何としても悲痛悲愴の極であつたに相違ない。而も私が特にこゝに記したいのは、下田を出發して江戸に到着する迄の五日間の道中に於ける松蔭先生の傳道である。勤王の志、火の如く、幕政を怒ること修羅の如き先生は、手錠足かせで駕籠に押込められながらも決して言葉なくしては過ごされなかつた。下田から三島迄裏街道の村々宿々に休めば必ず先生は軍鷄駕籠の中から群がり集ふ村民等に向つて傳道された。無智の村人等のことであるから、天下の大勢も國體の尊嚴も到底理解する事は出來なかつたにしてもその天を衝く如き意氣の前には悉く唾をのみ、鳴りを靜めて聞き入つたとのことである。下田から駕籠をかついだ番卒十數人の如きは三島へ着いたときには最早すつかりと先生の薫陶を受けて感奮勇躍固く先生の意を繼いで皇國の爲に盡さんことを誓ひ三島から交代の際にも懇々として先生の側を離るゝことに忍びず遠く江戸迄扈從することを願ひ出でたときへ云ふのである。一世の英雄がその心魂を打ち込んで唱ふる所の大道は相手の教育の有無を問はない。身の高下を論じない。觸るゝものは燒き盡さでは措かなかつたのであらう。後年の先生の記述の中に見ると、下田の牢獄から江戸の町奉行に移される迄のこの二ヶ月たらずの生活程勇氣と欣びに充實されたものはなかつたらしいのである。

現在の宗教運動や信仰の傳道を批判するために、松蔭先生を引例することはあまりに殘酷であるかも知れない。又かくの如き英雄がしば〳〵世に出でざるを憂ふる程私も非常識ではない積りである。たゞ私の云はんとする所は今日宗教の衰微する所以のものは、大衆が宗教に無關心なる爲でもなく、宗教そのものゝ内容が涸渇し來つた爲でもなく、更に又宗教傳道に要する財的後援の缺如せる原因でもなく、たゞ一遍にこれを傳ふるものゝ熱と意氣との解消した結果に外ならないことなのである。

「二宮翁夜話」を讀みて

自然や人生を正しく識るといふことは仲々むづかしい。宗教とか哲學とかいふのも結局はこの人間や宇宙に就ての正しい認識を求めることから出發したものだ。所が自然、人生或は更に突込んで天道とか人道とかいふものは、書物の上や議論では仲々悟得することが出來ないものであつて、たゞ深刻な生活經驗の中から生れて來るものらしい、されば各々境遇や性質や信仰なぞが異つてゐても深い經驗の中から産み出された處の人生觀宇宙觀といふものはそう大して異るものではない。古い聖人達の認識がその奥底には必ず一致したものがあるのは決して遇然ではない。

そこへ行くと現代の處世觀位粗末なものはない。それは處世觀が即ち書生觀であつてたゞ學校の教室や机の上ででつち上げられた空理を基礎とした丈で、何等複雜な社會生活から割出されたものでない結果に過ぎない。經濟革命とか社會科學とか唱へる人達の中にも眞實に今日の經濟機關を動かし又その中で働いたものは幾人あるものではない。農本主義とか、原始生活還元とか、テクノクラシーとか云つても皆之等は農業や商業や所謂今日の資本經濟の活動に關しては極めて緣の遠い、學者や書生が机の上で考へ出したものに過ぎない。從つてこれを實際に適用する場合には極めて多くの困難と支障が伴ない、更に之を强行しやうとするには多大の犠牲と危險を覺悟せねばならない。我々の生活や生命を空理の研究の犠牲にしたくはない。私が度々二宮先生を引き出すのは翁が實にこの活きた仕事をやり通し、眞に社會生活の深刻なる體驗から産み出された處世觀を教へられてゐるからである。私には翁が神、儒、佛に對して傳統的な信仰を持たれたか否かは少しも問題でない。否寧ろ翁こそは經驗を通して神儒の道を自ら體得し更に外道を貫いて内典に悟入した聖人と思へるのである。

天道と人道に就て翁は次のやうに云はれてゐる。

「夫、人の賤しむ處の畜道は天理自然の道なり。人道は天理に順ふといへども又作爲にして自然にあらず。雨にぬれ。日に昭られ、春は春艸を喰ひ、秋は木の實を喰ひ有れば喰ひ無き時は喰はず、是自然の道にあらずして何ぞ。居宅を作りて風雨を凌ぎ藏を作りて米粟を貯へ、衣服を製して寒暑を障ふるが如き是、作爲の道にして自然の道にあらざるなり」

翁更に曰く、

「天理と人道との差別を能辨別する人少なし。夫、人身あれば欲あるは天理なり、田畑へ草の生ずるに同じ。然れば人道は私欲を制するを道とすること尙田畑の草をさるを道とするが如し、かくの如く天理と人道とは格別のものなるが故に、天理は萬古變ぜず人道は一日怠れば忽ち廢る。されば人道は勤めるをもつて尊とし、自然に任するを尊ばず」。

自然主義と云ひ何々至上主義と云ひ人間の慾望のみを尊重した學者輩の唱ふる近代自由主義の思想が如何に粗末なものであるかはこの一節を讀んだ丈でも解る筈である。

貧富の懸隔とか階級對立とかの理屈を付け一切を社會組織の罪となし、自らは怠惰なすことなくたゞ富めるを怒るもの、これが近代の社會思想なのだ。たま〳〵これに反對するものは忽ち時代錯誤と斥けられ、權門の犬とコキ下されてしまう。何時の世でも聖賢は少なく衆愚は充滿するものである。

翁は曰く、

「富と貧とは元遠く隔つ物にあらず、只少しの隔りなり。其本源は只一つの心得なり。貧者は昨日のため今日勤め、昨年のために今年勤む。故に終身苦しんでその功なし。富者は明日のために今日勤め來年のために今年勤め安樂自在にして成す事成就せずといふことなし。然るを世の人今日飲む酒なきときは借りて飲み、今日食ふ米なきときは借りて喰ふ。是貧窮すべき原因なり。今日薪を取て明朝飯を炊き今夜縄を索ふて明日離を結はゞ安心にして差支なし。然るを貧者の仕方は明日取る薪にて今夕の飯を炊かんとし、明夜索ふ縄をもつて今日離を結ばんとするが如し、故に苦しんで功成らず云々」（八・八・一八）

至誠の力

日比野妙鏡

至誠鬼神をも動かすと申すことは從來とても耳にはして居りましたが、今度自分に最も因緣の深い人のまごゝろが、遂に多くの人達を善導された愉快な事實を目擊して、喜びのあまり其大要を左に御紹介致したいと存じます。

回顧せば今より七八年前、軍艦出雲がホノルルに寄港した時、在留同胞は狂喜し歡迎會を催しましたが、其の中の一人としてモイリヽ町に雜貨商を經營して居られた中村さんといふのがありました、然るにこの中村さんは歡迎會の歸途自動車が電車と衝突して重傷を負ひました。私は早速お見舞に行き、又た信仰の必要を力說致しました、機緣熟して居たものか有難くも忽ち改宗されたのですが、主人公は間もなく恢復に到らず不幸の死を見ました。併し夫人は二子を力に益々信仰を增進し教會の爲めに退轉なく給仕奉公を勵んで居られたのであります。

然るに自分も五十の坂は越えたものであるから、何日何時どんな事が突發せんも計り難い、人生無常なれば今の間に遺骨を鄉里に埋葬し、同時に故鄉の親戚一同をばこの正しき顯本法華に改宗せしめたいものと本年の春幾年振りかで歸朝され、船が横濱に着くと直ちに第一番に品川妙國寺の日生上人御展慕並に御遺族を見舞はれ、それから稱岡の土を踏まれました、懐かしい姉の家も禪宗であれば、折角の遺骨も直ちに伴ふ譯にも行かずと、離れた顯本のお寺へ參つて委細を打明かし預けられたのであります。

其後機會を造つては、兄弟親類の人々を一人宛、根氣よく正しき信仰を話し數ケ月間聊かも怠ることなく熱誠を以て說伏に勵まれた、そこに本佛の加被は現はれ遂に親戚一同は悉く隨喜の涙を以て改宗することになつたのであります。この事を菩提寺の禪宗和尙にも懇談された處が、先方に於ても異議なく、殊に埋骨及び改葬の當日は親しく遠路を厭はず參列

されて、珍らしき建塔並に改宗の盛典を擧げ積年の宿願が達成されました。

夫人が歸朝の時の憂ひの顏も、今回は日本晴の如き爽快の容姿を以て七月二十一日の便船で、最早何等思ひ遺す事はないと、故國をあとに布哇の永年住み馴れた地に引還られました。この日は磯部氏も態々お見送りに横濱迄出向かれたが、一足違ひでお遇ひ出來ずに洵に殘念であつたと聞いて、私も遺憾に思ひました。

布哇の天地は太平洋の一群島でありますが、早くから吾等日本人の活動舞臺であり、從つて宗教の側に於ても、基督教は勿論神道、佛教等混然として百貨店の觀を呈して居ります日蓮門下さへもが數派あつて、そのいづれもが、迷信類似で眞に大聖人の正眼を傳えて居るや否やに到つては私として、大に述べたいものがありますけれ共他日に讓りませう。『惡は多けれ共一善に勝つことなし』佛祖の正系を奉じて一路正信に吾も勵み、人をも致さんことを念願して、第二、第三の中村夫人を作り出さんことに精進致しませう。

所感

（本部團報七月三十日記事參照）

北村旭三

私は統一團員でもなければ、團に關係ある者でもありません、唯此處に納涼に來て一場の講演を聽かされた一人であります。先週の晩も亦今晩もこゝに少數の方々が熱烈に布教されて居る態度を見ては大に感動を與へらるゝものであります。皆さんは宗教に就て、又題目の信仰に就てどうお考へになつて居りませうか、私はあまり詳しい事は知りませぬけれ共其の一端を窺ひまするに、世界に二大宗教とされてゐる基督教と佛教に關して、基督教は最早其の教理の根抵に於て動搖を來たしまして、青年の間には用ゐられなく、殊に我國に於ては國體と合致せないものがあります、最近も大垣で又問題を惹起しました。けれ共、佛教に於ては、特に日蓮聖人の教に於ては我々日本人、亦日本國に最も重大な關係を有つものであります。この尊い、大切な、有難い明教がどうして弘まらないのか、何が故でありませうか……

皆さんは今日の宗教家が、何宗派に關せず坊さんがどんな態度を採つてゐるかを御存じでありますか徒らに大きな殿堂にあつて死人相手に豪華な生活を營み、人々に教を說くべき宗教家の身分をも忘れたように、在家の者と等しく暑いからといつて避暑だとか、ヤレ營養だ、保養だと贅澤三昧に人を頤で使つてゐるが、果してそんな事をお祖師樣は遊ばしたのであるか、お釋迦樣はそんな態度を示されたのであらうか。吾々活ける人間を捨てゝ死人の爲めに佛教が遺されたり、お布施を持つて來さし、病氣祈禱の爲めに南無妙法蓮華經が唱へ出されたのか……

一體南無妙法蓮華經とは何んのことなのか、又佛とは死人が佛のことの樣に思つてゐる人も世間には一ぱいあるが、佛樣が死人と間違えられるやうでは勿論我々人間として生れ出たものが、毎日いかになすべきか判らぬのも、別に不思議ではないが、それでは所謂醉生夢死ではないのですか、人は皆菩薩の行願に精進せよと教へられたが、そんなことを私が今此所で說法すべき筋合ではありません、それは統一團の方々にお聞きになればよろしい、只私はこの世界第一の明教が微々として振はないことを慨嘆され、たとへ一人でもよいと會館を出でゝ街頭に立ち毎週聲を嗄して布教されて居る雄々しい態度に深い敬意を拂ふと共に、それがほんとの佛陀の御精神であり、それが七百年前祖師に依つてなされた化導の方法だと大に共鳴禁ずる能はざるものがあつて、甚だ皆さんには僭越でありましたが一言述べさせて戴いた次第であります。南無妙法蓮華經。

求道熱

みどり

釋尊が舍衛城の祇園精舍に在ました時のこと、ある日、阿那律尊者は釋尊の御說法を聽聞しながら氣持ちよくうと〳〵と居眠りを始めました。御佛はこの樣子を御覽遊ばして、

「阿那律よ、汝は國法を畏れて出家したのか、それとも又盜賊に襲はれるのを恐れてなつたのか」

彼はハットして恐る〳〵申上ました、

「世尊よ、決してさういふ譯ではございません、私は老病死の苦しみを離れたいが爲めに出家致しました。」

「阿那律よ、さうであらう、それであれば何故に

如來の說法最中に眠を貪るのであるか」
彼は全く恐縮し、忽ち强い決心の色を現はしまして、座を起ち右の肩をあらはにし、跪づいて合掌しつゝ釋尊を仰いで申上げました。
「私は身も心も倦怠を感じて居りました、今後はたとひ身體が爛れ融けやうとも、決して睡りませぬ」
と、それ以後は每夜曉に至るまでも決して眠ることなく、熱心に道を求めましたが、その爲め終には眼を患ふやうになりました。
これを御覽なされた　釋尊は彼に注意を與へられました。
「急に修行すればくやみの念が起り、おこたりに過ぐれば煩惱が起る、それであるから汝も中道を歩むがよろしい」
けれ共、阿那律は懺悔と共にお言葉に從ひかねました。
「世尊よ、私は、私の誓ひの通りに進ませて頂きます」
釋尊は大層不愍に思召して名醫者婆を招いて彼の眼を診させられました、者婆は、
「若し阿那律が少しでも眠るならば治すことが出來ます」
と申上げました。そこで　釋尊は重ねて、阿那律に御注意を與へられました。
「阿那律よ、一切のものは皆食物に依つて生きて居るのである。耳は聲を食物とし、鼻は香を食物に、舌は味を、身體は觸を、意は法を、而して眼は眠りを食物としてゐる、者婆のいふやうに睡眠を採つて眼病を癒すがよろしからう、更にまた涅槃にも食物がある」
「涅槃は何を食物と致しますか」
「阿那律よ、涅槃は不放逸即ち精進を食物とするのである、不放逸に由つてさとりに到るのである」

「世尊よ、たとへ眼が睡眠を食物と致しましても、私はどうしても眠りを貪ることは出來ませぬ」
遂に彼の眼は用を爲さなくなりました、併しそれと同時に彼は天眼通を獲て、佛弟子中の天眼第一と稱へられました。

○　□　○

眼を失ふて後　阿那律尊者がある時、衣を縫ふのに針の孔に糸を通ほすことが出來ないで、密かに自分の爲めに糸を通して功德を積むべき人を需めて居りました。釋尊は彼の意をお知りになつて、直樣その前に現はれ、
「七月通してあげよう」
『信仰られました、彼は非常に驚いて、
同九日、私は世間の福德を求める人に針を徹し師、磯部
同十二日と思つたのです、御佛の樣な福德圓滿のお方にお願ひするのは寔に恐れ入ります」
釋尊は彼を制し給ふて、
「阿那律よ、世間に於て善事を求むる第一人者は如來である。如來は常恒に布施、持戒、忍辱、精進禪定、智慧の六法に就いてあきたりないのである」
「世尊よ、如來は功德身、法の身であらせらるゝに。更にまたこの上法を求めなさいますのでありますか、如來は既に生死の海を渡つて執着を解脫されて居るのに、尙福德をお求めなさるのでありますか」
「阿那律よ、決してさうではない、如來は善を行ひ、道を行ふに就ては曾て暫くも十分滿足せる心を起さないのである」
ア、、法華經如來壽量品には「作す所の佛事未だ曾て暫くも廢せず」、或は「我本行菩薩道」が說かれて居ります。上記の短かい二つのやさしいお話の中に尠なくも數種の深い、貴い敎が、秘め込まれて居りませう。道を求むる者にはまことに有難く感ぜられますまゝに餘白がありませば、よろしくお願申上ます。

如來の說
彼は全く報
て、座を却

釋尊部團報

毎日曜屋外講演　前月號に念告の通り暑い日中は例會を差し控えて夜分に街頭に進出することになし其第一夜七月二十三日第四日曜日晩七時から先づ會館で修法を營み、それから側の大太鼓の音も、山鹿流進撃の式に擊ち、莫々たる響が晉羽の大通りに鳴り渡つて、恩師日生上人御梁棟の大支題旗を押立て江戸川公園に出陣した。

そこには救世軍が既に一隅に於て布教しつゝあつたが、我等の太鼓の音に敬遠したのか或は最早時間の爲めか數分後には解散して行つたことを氣の毒に思つた。義には芝の大門でも兩々相對峙して傳道した事もあつて、彼等の熱心さには大に學ぶ處がある。

開會の辭をかねて磯部滿事氏は『日本人』の題下に數十分叫び、次に『非常時の信念』の意義に關して和賀義見師は熱辯を振はれ、閉會の辭として村田逸雄氏は『日本國體の尊嚴』を說いて九時三十分引上げた。當夜奉仕者として長岡、渡邊、土屋等の諸兄姉あつて、日生上人の自誓文『人』を二百餘枚配布することが出來た。

同三十日第五日曜日　前回通り江戸川公園前に陣頭を進めたが、今度も救世軍と遇つた

劈頭『處世の大事』と題して磯部滿事氏は聲を嗄らし、次に『法と國』に就て山口智光師懸河の辯を以てし、次に『日本人の自覺』をば綿引弘氏熱說された。折柄前回も見えた聽衆の一人北村翁は大に感激を催し、遂に解散欄に掲げた意味を約二十分間述べ、最後に村田逸雄氏の題目三唱で閉會した。

奉仕者長岡、山口の二氏で、聽衆百餘名に達した。

八月六日は生憎の驟雨で遂に休講。

同十三日第二日曜日　當例に依つて救陣を張り『純正日蓮主義』に就て磯部滿事氏は數十分師子吼し、次に『法華經の信仰』に關して綿引弘氏は縱橫に說き來り說き去り多大の感激を與へられた。

奉仕者長岡氏のみ、當夜は主催者の側に於ては僅かに三名に過ぎないが、而かも其熱誠の意氣は衝るべからずである。又月こそ違え十三日は　日蓮聖人の御聖日であるから百餘の聽衆へ雜誌「統一」及「救」數十部を施本したが、中には時代を憁々支拂はれた篤志家もあつた、以て其の反響の一端を知るべしであらう。

同二十日第三日曜日　責任講師は千葉の槻木師並に横濱の中村氏、共に遠路を態々法の爲めの故に御來援下さつたことは洵に有難い善根である。『人生と信仰』磯部滿事氏、『思想と宗教』中村清一氏、『市民の自覺を促す』槻木顯正師に依つて九時四十分迄敷行されたがこの一晩こそ生死の境であるとの決死の廣長舌は凄じいものであつた。

奉仕者長岡氏は毎回板橋から態々出向いて下さるし、又本田氏は本所から、其他當夜は大井から沼部氏夫妻が御後援下さつて、殊に閉會後一同へ永水の御供養があつた事を感謝し並に附記する。又關員一名申込があつた事は有難い事共である。

夏期鎭行會　夏の朝こそ早く起きる功德はより一層大したもので、一日を爽快ならしむる。そこで早起會も隨所にあるが、本團の動行會こそ常在者には何でもない事で敢て八月丈けに限らず、いつも早朝お題目の梵音が晉羽の谷間から流れ出て居るけれども、五時三十分迄に參詣しようとさるゝ市中の方々には隨分犧牲を拂はるる事と御同情申上げて、果して永續するかどうかと最利は惧ぶんだのは相濟まぬ次第であつた。來會者は極めて少數で十指に足らないとはいえ、毎朝雨でも風でも厭はず男子のみならず、婦人の方々さえもが集まらるゝには涙がこぼるゝ過去の宿善の賞す處か、これが優曇華の活きた花と直感を催す次第であります。

『信は道の元功德の母』も、自らかゝる中に體驗せしめらるゝいと貴き意義深い會であつたことを歎ぶ。

横濱教誌

七月四日　夜、神奈川篠原町西村氏方集會
『信仰と修養』磯部滿事氏

同九日　夜、磯子高橋氏方集會。和賀義見師、磯部滿事氏東京より御來講。

同十二日　午前十時半、磯部先生御病子大慈院克難疾得日蓮信士並に殃死者の盂蘭盆會追善菩提のため、その遺蹟個所に建てられた供養塔前にて、會員一同參集して唱題廻向。磯部先生御夫妻も勿論東京から見えられた。

同日　夜、神奈川鶴屋町京田氏方集會。
『日蓮聖人の敎』磯部滿事氏

同十四日　夜、中區和田氏方にて集會。參ねて中區方面會員のための櫓經、小西師東京より御來濱。磯部氏『佛敎の孝道』講話

同十五日　櫓經の日。早朝より小西師が、會員の高橋、平岡、齋藤、金子、石毛等の諸氏の宅を廻られた。

同十八日　午後、生麥貝塚氏方集會。小西師、磯部氏御來講。夜の三ッ澤岩上氏方の集りは都合にて中止。

同二十一日　午後、神奈川石毛氏方にて、夜二本榎金子氏にて集會。和賀師、磯部氏御來濱。

同二十五日　夜、磯子稻葉氏方集會。
『佛寶に就て』磯部滿事氏

二本松教信

七月四日　於蓮華寺題目講修行す。

同九日　午前一時二十七分二本松驛通過にて山形、弘前部隊凱旋す因つて歡迎す。

同日　午後一時五十七分二本松驛通過にて獨立守備歩兵第三大隊少佐荒木誠四郎氏の遺骨を迎へ讀經す。

同十五日　二本松佛敎不染會托鉢修行。

同十八日　午前四時一分二本松驛通過にて滿洲派遣看護兵を歡迎す。

同二十三日　午後二時二十一分二本松驛通過にて獨立守備歩兵第五大隊第四中隊齋藤亨一等兵の遺骨郷里に向ふ因つて出迎へ讀經す

新加盟者

岡山縣兒島郡甲浦村
岡野コキヨ殿
（小高與吉氏御紹介）

横濱市磯子區磯子町
高橋傳殿
（磯部氏御紹介）

東京市本所區綠町三ノ十六
篠崎本國院殿
（山口智光氏御紹介）

同　豐島區西巢鴨町二ノ二四六六
内藤商店殿
（濱中治三郎氏御紹介）

寄附維持金團費誌料領收

（自七月二十一日至八月二十日）

一金貳圓也　千葉縣　千代木常整殿
一金七圓八拾錢也　靜岡縣　玄妙寺殿
一金參圓也　東京　大原孟雄殿
一金貳圓貳拾錢也　福島　岩井常殿
同　原田清吉殿
一金貳圓貳拾錢也　金澤　利江殿
同　中村美津殿
同　中村與四郎殿
一金貳圓貳拾錢也　日下治作殿
同　御厨正幸殿
一金壹圓貳拾錢也　朝鮮　田口公信殿
一金拾五圓也　東京　高田保太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　山口智光殿
同
一金壹圓五拾錢也　青山信市殿
同
一金壹圓貳拾錢也　齋藤昭行殿
同
一金貳圓四拾錢也　福岡　齋藤房太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　小峰登子殿
一金壹圓也
一金壹圓貳拾錢也　福岡縣　秋山照代殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　金指龜吉殿
一金壹圓貳拾錢也　横濱　伊藤喜造殿
一金貳圓貳拾錢也　同　鈴木二光殿
一金貳　圓也　東京　鳥谷正三郎殿
一金貳　圓也　兵庫縣　笹井つた殿
一金貳拾五圓也　東京　横山正三殿
一金拾　圓也　靜岡縣　柴田武治殿
一金貳圓貳拾錢也　府下　寺澤信平殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　西川寅吉殿
一金壹圓貳拾錢也　萩　石山堅殿
一金貳圓貳拾錢也　福島縣　渡部トミ殿
一金貳圓貳拾六錢也　鎌倉　松木喜八郎殿
一金九圓四拾壹錢也　萩　小高與吉殿
一金貳圓貳拾錢也　岡山縣　岡野コキヨ殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　傳殿
一金拾　圓也　東京　井上道太郎殿
一金貳　圓也　石原重太郎殿
同　鈴木敬友殿
一金壹圓貳拾錢也　千葉縣　川村善助殿
同
一金貳圓貳拾錢也　東京　尾形多喜男殿
一金壹圓貳拾錢也　千葉縣　並木博殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　菊地雄三殿
一金參圓五拾錢也　大阪　富田清子殿
一金壹圓貳拾錢也　横濱　杉本光術殿
一金壹圓貳拾錢也　甲府　高野毅殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　篠崎本國院殿
一金參　拾　圓也

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

法華經講座第二期開始

小林一郎先生ノ法華經講座第二期トシテ來ル第二木曜日十四日ヨリ左記從前通リ極メテ周到懇切ニ續講致サルベク候間御誘合セ奮ツテ御來聽相成度此段謹告仕候

記

一、日　時　毎週木曜日午後七時ヨリ八時三十分マデ（時間正確）
一、場　所　本會館
一、聽講料　一ケ月前納金壹圓也
　　六ケ月同金五圓也
　　一ケ年同金八圓也

昭和八年九月一日

財團法人統一團

小石川區音羽町六丁目電停前
電話牛込（34）五三三六番

猶今期ノ始マリハ方便品終ノ偈「舍利弗當知、我本立誓願、欲令一切衆、如我等無異、如我昔所願、今者已滿足」ヨリ續講ノ筈ニ御座候

謹告

各位の渇望されて居りました 故本多日生上人御撰述に依る本・經・祖・書・要・文・全・部・が掲載された勤行方軌としての 法華經要品 がいよ／＼清朝新活字を用ゐて見事に出來致しました。又日生上人が先年入念に弘通用として謹書し置かれし 大曼荼羅御本尊 は授與願出の方に感得者心得を相添へ、便宜お願ち致します。

此御本尊と要品があれば、子々孫々迄も信行上には百パーセント疑ありません。殊に要品は日蓮主義心髓たる本經祖書要文全部ありますから、自家用には勿論、布教用にも、施本用にも、洵に適當と存じます。

故本多大僧正撰
法華經要品 並 本經祖書要文集 壹部
改正定價 金五拾錢 送料共

御本尊
大 特別用
中 普通小型佛壇用
小 懷中用

授與御希望の方は願書提出の事
書式用紙は御報次第差上ます。

勤行作法 壹部 金拾錢 送料共

百部以上御注文の時は御望に依り貴名刷込み致します。

統一定價
一冊 金貳拾錢 送料五厘
半ヶ年 金壹圓貳拾錢
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和八年八月廿四日印刷納本
昭和八年九月一日發行
（第四百六十二號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼發行人 礒部滿事
印刷人 鈴木日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所 財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

目次

聖訓摘要語 …… 日生上人
日蓮教學講座（第一回） …… 河合陟明
左翼闘士の轉向 …… 上田辰卯
日蓮聖人讃唱の詩 …… 中山喬司
蘭室往訪記 …… 礒部滿事
質疑應答 …… 梶木顯正

○本部團報並に各地教信　○寄附團費誌料領收

第三十八年十月號